

第三講 作り物語『源氏物語』少女^{おとめ}

【練習問題】

次の文章は、『源氏物語』少女の巻の一節である。夕霧は同じ祖母大宮のもとで育てられた従姉^{いとこ}である雲居の雁^{かり}と相愛の仲であった。が、このことを知った雲居の雁の父内大臣は、立腹して雲居の雁を自邸に引き取るうとする。問題文は、まだ大宮のもとにいる雲居の雁に夕霧が会いに来た場面である。これを読んで、後の問に答えよ。

いとど文¹なども通はんことの^aかたきなめりと思ふに、いとなげかし。物まゐり^(注1)などしたまへど、²さら²にまゐらで、寝たまひぬるやうなれど、心もそらにて、人しづまるほどに、中障子^(注2)を引けど、例はことに鎖^さし固めなどもせぬを、つと鎖して、人の音もせず。いと心細くおぼえて、障子に寄りかかりてゐたまへるに、女君も目を覚まして、風の音の竹に待ちとられてうちそよめくに、雁^{かり}の鳴きわたる声のほかに聞ゆるに、幼き心地にも、とかく思^{おほ}し乱るるにや、「雲居^(注3)の雁もわがごとや」と、独り³ごちたまふけはひ、若うらうたげなり。いみじう⁴心もとなければ、「これ開けさせたまへ。小侍やさぶらふ」とのたまへど、音もせず。御乳母子^(注4)なりけり。独り⁵言を聞きたまひけるも恥づかしくて、あいなく御顔も引き入れたまへど、あはれは知らぬにしも

〔重要語句〕

- いとど
- 文
- かたし
- いと
- なげかし
- さらに
- そらなり
- ことに
- 鎖す
- つと
- おぼゆ
- ある
- とかく
- 独りごつ
- けはひ
- らうたげなり
- いみじ

問一 傍線部 a 「かたきなめり」を品詞分解したものととして最も適当なものを、次のア～オのうちから一つ選べ。

- ア 形容詞 + 助動詞 + 助動詞
- イ 名詞 + 助動詞 + 助動詞
- ウ 名詞 + 助詞 + 助動詞
- エ 形容詞 + 助詞 + 助動詞
- オ 形容詞 + 助動詞

問二 傍線部 1 「いとど」・ 4 「心もとなければ」・ 6 「かたみに」の語句の意味を記せ。

1	4
6	

問三 傍線部 2 「さらにまゐらで、寝たまひぬる」・ 3 「幼き心地にも、とかく思し乱るるにや」を、主語を明示して現代語訳せよ。

2	3

- 〔古典常識〕
- 障子
 - 雁
 - 乳母子
 - 乳母
 - 荻

〔三〕次の文章を読んで、後の問いに答えよ。(設問の都合で、送り仮名を省いたところがある。)

舒王性酷嗜書、雖寢食間、手不積卷。

昼或宴居默坐、研究經旨。知常州、對

客語、未嘗有笑容。一日大会賓佐。倡優

在庭、公忽大笑。人頗怪之、乃共呼優人

厚遺之曰、「汝之芸能使太守開顔。真可

賞也。」有三人竊疑公笑不由此。因乘間

啓公。公曰、「疇日席上、偶思咸・常二卦。

豁悟微旨、自喜有得。故不覺發笑耳。」

〔出典〕
『墨客揮犀』

〔重要語〕

- 性
- 雖
- 積
- 或
- 嘗
- 容
- 一日
- 忽
- 頗
- 乃
- 遺
- 汝
- 能
- 可
- 竊
- 因
- 啓
- 偶
- 自
- 故

(注) ○舒王——北宋の政治家王安石のこと。「公」も王安石を指す。

○宴居——くつろいでいる。 ○経旨——儒教の経典の内容。

○知「常州」——常州の長官である。 ○賓佐——賓客と部下。

○倡優——俳優、芸人。「優人」も同じ。 ○太守——州の長官。

○疇日——先日。 ○咸・常二卦——『易経』の記述。

○豁悟——疑問が突然消えてさとする。 ○微旨——聖人の奥深い考え。

問一 傍線部ア「雖」、イ「因」の読みを、送り仮名も含めて平仮名ばかりで答えよ。

ア
イ

問二 傍線部①「未嘗有笑容」を書き下し文に改めよ。

--

〔重要構文〕

○未——(再読文字)

○使「A □」(使役形)

○——耳(限定形)

↓巻末の重要語⑳㉓を見てもよう。

↓【ポイント】再読文字を見てもよう。
巻末の重要語⑭を見てもよう。